

第二期 第五十六号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2021. 03. 20 定有堂書店 発行

本のある暮らし、ただし本屋

奈良 敏行

失われた本をもとめて

三砂 慶明

ヴェイユ・スピノザ・道元

丸 祐一

緊急事態宣言下の小市民的生活

吉田 海将

「ことばの教育」とは

三浦 永理

「深い学び」をめぐる V

松田 裕史

打倒 AI ～授業論～

芝野 浩貴

ワイドショー・ウオッチャーの憂鬱

萩原 俊郎

いつにもましてぼんやりしている日記

鳥居 貴彦

八代日記 (十二)

齊藤 仁昭

不思議町の系譜

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その五十五

内田 克彦

戦下のヴィルトウオーゾ Bの場合

秦阜 梅林

春の豆

あきの素生

バナナ牛乳

ドラマリア

…… 編集後記



本のある暮らし、ただし本屋

奈良 敏行

(定有堂 店主)

座談会形式のシンポジウムに誘われたが二の足を踏んでしまった。「本のある暮らし」がテーマだったので、一瞬乗り気になったが、ためらってしまった。コロナ禍の一年で視野が狭くなり、意見がかみ合いづらくなっている気がする。分断のはじまりだろうか。

出かけることも少なくなったり、出版関係者の訪問も減少した。その結果まなざしが内向きになった。あたらしい情動が生成しないので、いまここにある情報を精査することとなる。視野が狭くなるというのはそういう事態と無関係ではない。

一月下旬に地元の新聞社から取材を受けた。コロナ禍でどんな工夫をしていますか？ という問いに、「みなさん本を選ぶのに時間をかけたくないという気持ちがあるので、表紙がなるべく見えるようにして、速攻買いができるよう務めています」と答えた。こんなときだからこ

そ読もうというのか人文書がよく動く。

目立つコーナーに無規則に本を展示している。「これは？」と聞かれ、「二度売れて補充で戻ってきた本です」と答える。直近、人がどんな本を求めたかがわかる。

文庫も大多数が表紙陳列だ。ちくま文庫が中心でしかも旧刊が占める割合が多い。いまはスリップレスだが補充品にはまだスリップが残っているものが多い。売れ行き上位でないことが知れる。パレットの法則というがある。二割の銘柄が八割の売り上げを占めるという経験則だ。データをとってその二割をしつこくあちこちに表紙陳列している。

本との日々がくり返されるうち、絞り込みやとりまとめが固有に形成されるのが、本屋における本との暮らしの特色だ。それが本屋の方法、セオリーなのだが、考えの土台でもあり、ベーシックセオリーと呼ぶこともできる。生成の源流は、読者のひとたちの「こころ」の反映だ。読者の気分が変われば、このベーシックセオリーも、それにつれて変化する。

セオリーはざっくりした「とりまとめ」だが、書物の内容傾向はそうではない。ベーシックセオリーといういい方をしたが、それはハイレゾリューション(高解像度)傾向にある。スペイン風邪のパンデミックは収束に三年を費やしたというが、新型コロナウイルスもおそらく同様の経過

をたどると推測される。三年を乗り切れない人も大勢いるし三年は長い。世界が変わる瞬間をわたしたちは体験している。その体験は分断を深める。知覚のレイヤーが多層化するからだ。そのため移りゆく世界をとらえるグランドセオリーはハイレゾリューションになる。内向きになった本との暮らし、ただし本屋、での「二割」の場所は、新しいベーシックセオリーへと向かっている。

読者の「こころ」の気分は、こんな景色の中を過ぎていく。哲学者は概念を提示する。その概念はそのままグランドセオリーだと、「中動態」を提示するのは、國分功一郎さんと、脱成長コミュニティという概念で、「人新世」を語る斎藤幸平さんの、歩みの向こうにコロナの三年後が見渡せる。芸術革命のブルトンは「ナジャ」で、そこには希望の「キ」の字だけがあったと述べたが、希望の概念はいつも人を裏切る。救済は未来でなくいまここと、「捨ててこそ」の講釈師、栗原康さんの説く、概念よりも感情だと歌い踊る、そのグランドセオリーも、相補って新型コロナウイルスへのリアリティを導くように思える。本屋のベーシックセオリーはこの周辺を右往左往している。

直近の読者が購入した本を並べているのは、本屋空間に、この地域というよりも往來のベーシックセオリーを、「見える化」したいからだ。こんな本が読まれています

が、どう思いますかと尋ね、店頭で学びを深める。会話の後メールで補足してくれる人もいる。また或る人は、世界がハイレゾリユーシオン化していると語り、教えてくれた本に『つながりの作法』という綾屋紗月さんと熊谷晋一郎さんの対話があった。ハイレゾリユーシオンの世界が簡潔にとりまとめられている。本のある暮らしもここまで高解像度で語られることに驚く。そして次なるグラウンドセオリーはこの「当事者」の場所を抜きには語れないと思うようになった。

2021.02.17

(参考)

國分功一郎・熊谷晋一郎『〈責任〉の生成―中動態と当事者研究』新曜社 2020

栗原康『はたらかないで、たらふく食べたい増補版』ちくま文庫 2021

綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法―同じでもなく、違うでもなく』NHK生活者新書 2010

『本と本屋の本ばかり読書録』

本屋巡礼・偏ったブックガイド2020 〈どむか〉

発行 「どむか」 2021年2月25日

歸山健一さんが昨年一年に出合った、本屋について語る本や雑誌の紹介。月刊「本棚の溜息」通信をハガキで刊行されているのだが、同時にその拡大版ともいえるデジタル版も配信されている。その電脳版「本棚の溜息」の昨年一月号から一二月号までの「読書録」が、書影と文章でくわしく収録。ことばで説明しつくせない豊かな森羅万象の世界です。

読んだ本、うわさだけは耳にした本、まったく知らなかった本もあり、ついつい食い入るように引き込まれてしまいました。奥付には、初版一刷 14 / 16 と記載あり大感激。



本と本屋の本ばかり読書録
本屋巡礼・偏ったブックガイド2020 〈どむか〉

失われた本をもとめて

『人文書担当者のための日本史概説』と

『ホッピー対談総集編』（非売品）

三砂 慶明

（「読書室」主宰）

本屋で働きはじめて、絶版、品切以外にも売ることができない本があることに気がつきました。非売品の本です。

尊敬している人文書の専門家の岡村正純さんが、J書店の研修用に書かれた手引きを本にまとめるという噂を人伝てに聞いた私は、その本が読みたくてたまらなくなりました。どこから刊行されるのかを突き止めるべく、電話をかけはじめると、どうやら歴史書懇話会が動いているらしい、という情報をつきとめました。

なんてことだ！

売りたい！

読む前からすでに興奮の坩堝と化していた私は、歴史書懇話会の担当者に電話をかけて「売りたい」熱意を伝えるものの、「ご期待にそえず申し訳ありませんが、非売品です」と即答されてしまいました。平台、棚、フェア、イベント、手練手管をつくして100冊がつんと売ろうと思った計画は夢の藻屑と消えました。

めでたく2018年6月30日に刊行された岡村さんの『人文書担当者のための日本史概説』（歴史書懇話会・非売品）は、名作で、なぜこの本の隣にこの本があるのか。専門書を研究者のように読み続けてきた岡村さんならではの配置や、歴史書版元との緊張感ある本棚についての議論が盛り込まれていて、歴史書に詳しくない私も、岡村さんの肩にのって、歴史書の地平線を見渡すことができる、爽快な本でした。書店員としては、巻末の付録の棚チャートも必読ですが、その作り込まれた棚とは別に、本文はほぼ中世史が中心と、書店員の棚を作り込む技術と歴史書の読者としての熱烈的愛情が反比例していて、痛快でした。

岡村さんとは人文会がご縁で、お話させていただくことになり、帳合の違う今は亡き栗田の「お

でんの会」にも連れて行ってもらったりと、新人の私を色々な版元に紹介してくださった、私の師匠です。

職場は違えど、同じ関西の書店で働いていたご縁で、ときどきご挨拶にうかがうと、岡村さんのおすすめの歴史書（絶版品切の本）を紙袋いっぱい頂いて、読ませていただきました。私の家の本棚には、岡村棚が一段あり、そこには妙に高度で粒のそろった本が勢揃いしています。

読む本がなくなると、退勤前の時間を狙って、次に読む本の話の伺いにいきます。読ませていただいた本の感想をお伝えしつつ、今、自分が興味をもっている、本屋の本や出版文化について示唆を与えてくれる本についておたずねすると、差し出してくださったのが、平凡社営業部の名物企画「ホッピー対談」をまとめた『ホッピー対談総集編』（非売品）でした。

読んでるだけなのに、一度もお会いしたことがない営業部長の藤代トークに腹筋が崩壊。仕事中心なんだろうか、という問いを徹塵も抱かせない巻き込み力には、感銘を受けました。お酒を飲みながら出版文化と、それを支えている人に対する惜しみない愛情が注がれているのも感動的で、人文

会の制作した現代思想チャート図が、実は『美学イデオロギー』からはじまっていたという目から鱗話も飛び出したり、読むのがやめられません。

ヴェイユ・スピノザ・道元

丸 祐一

(法哲学者)

どれもきちんと勉強してないことで三題断を書くのは無理があるが、そんなことを言っているといつまでも書けない。現在、シモーヌ・ヴェーユ『重力と恩寵』（渡辺義愛訳、1948=2020、春秋社）を読んでいる。2017年には岩波文庫でも翻訳が出ていて、そちらは『カイエ』をもとに新たに校訂された版の翻訳だそうで、ちよつと内容が違う。春秋社版はテイボンの視点で編集されているので、テイボンが読みたいヴェイユなのだろう。ところで岩波版は表紙に「たえまなく襲いかかる不幸⇨重力」と書かれている。これでは読者が「重力」って何だろう、とか「真空」って何だろう、というヴェイユの言葉遣いの不思議さを味わう楽しみを奪ってしまう。しかし、そもそもヴェイユは不幸だけを「重力」だと考えていたのだろうか。「重力」は「私」の外にあって、「私」に働きかけてくる何かである。スピノザであれば、その外からの刺激によって、喜びがもたらされることもあれば⇨

喜びをもたらすものは善、脆弱な状態におかれる⇨憎しみや妬みを感じさせるものは悪、だと捉えられる。ヴェイユであっても喜びという感情をただちに不幸だとはしないだろうし、何か嬉しさをもたらすものも一つの重力であろうから、不幸⇨重力としてしまうのは言いすぎではないか。もちろん、その喜びはその場しのぎであって、真の喜びは「恩寵」によってしかもたらされない。その場しのぎの喜びは「真空」を埋めてしまうから、それは神の「恩寵」を受け入れる余地がなくなってしまう、というのがおそらくヴェイユの考えである。その場しのぎの喜びが私の「真空」を満たしてしまうと、「私⇨自我」が生まれてしまう。そうすると、「私」を維持したくなるという欲望が湧いてしまい、神に助けを求めてしまう。神の恩寵に気づくことを妨げているのは、この「私」へのこだわりであり、したがって神を求めるといふ能動性はなくさなければならぬ。ヴェイユは「求めよさらば与えられん」（マタイ伝）とは真逆の立場であり、神を求めている限りは恩寵に気づけないというヨブ記の世界観である。

スピノザであれば、外からの刺激が喜びをもたらすなら、その喜びをもたらしたものは善だということになるので、そこはヴェイユとまったく違うが、國分功一郎によれば、スピノザにとつての「真理」は、「『ああ、こ

これは真理だ』とわかるのであって、それ以外に真理の眞理性を証し立てるものはない」（『はじめてのスピノザ』2020、講談社、137頁）。このような真理のとらえ方は、ヴェイユにとつての「恩寵」と同じように思われる。仏教でもおおよそっぱな括りだが、仏は救いの手をわたしに常に差し伸べているけれども、わたしは通常それに気づかない。ふとした瞬間に、「わたしは既に救われていた」ということに気づくのだ。奥野・吉村・伊藤『ひび割れた日常』（2020、亜紀書房）では、人が意味を求める生き物であることが話題となった際に『正法眼蔵』が引かれ、意味を求めれば「迷い」が生じるが、「外部からやってくる意味」には「笑えてもくる。そして、爽やかな気分になる」（127頁）と論じられている。ヴェイユの恩寵も「これが恩寵だ」と不意にわかるのだろう。ある人はヴェイユの恩寵とは、「空の青さに気づく」とか「世界の美に気づく」ことではないか、という。そういうことのような気もするが、ヴェイユの「恩寵」はこの種の感性的なものではなく、オットーのいう「ヌミノーズ」のような超感性的な体験ではないか。ヴェイユを神秘主義者として理解する人たちはそう考えているのだろう。

バタイユは『空の青み』でヴェイユをモデルとしてラザールというキャラクターを描いている。「疾病、疲労、困窮、死といったことは、彼女にとつてまったく重みを

持たなかった」（伊東守男訳、1971、二見書房、100頁）。「他人の幸福に対して軽蔑しか抱かない人間」（同112頁）。「彼女にあつて一番私の興味を惹いたものは、人生の廃嫡者たちのためにその生命と血とを捧げさせるように彼女を追いつめてゆく病的な食欲さであつた」（同101頁）。と、ヴェイユは散々な描かれようである。ヴェイユの本は、社会運動をしていたクリスチャンの女性たちが読んでいたそうだ。道元のように「大悟」した人が書いた本であれば、修行のうちに悟ることに希望が持てるが、ヴェイユは恩寵を賜つたわけではなく、ただ恩寵がどのようなものかを解釈しているに過ぎない。ヴェイユの論理は、例えば学生運動で搾取されていた女性たちにその搾取を受け入れるよう作用しなかつただろうか。確かに搾取される中で「恩寵」に気づけた可能性がないわけではない。ヴェイユを読んでいるとニーチェの言う「奴隷道德」的な危険性を感じてしまう。キルケゴールとの関係も気になる。

緊急事態宣言下の小市民的生活

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

先月の「音信不通」で、奈良さんが十一月、十二月はいつもの長めの文章を書く代わりに「断章を並べていつもの分量に収めた」と書いている。行動が限られる寒い時期に、コロナ禍の感染爆発となり、さすがに身の危険を感じた私の外出も激減した。年明け以降の東京の単身赴任生活は連続性がなく、ぶつ切りにされたような毎日が続く。二月いっぱい、首都圏以外は緊急事態宣言が解除され、私もようやく年明け以降の生活を思いつくままに振り返ってみよう、と思えるようになった。

■私の感染対策

マスクはドラッグストアで売っている廉価なものだと、息の漏れが多いような気がするので、近所の女性が手作りしているものを買っている。鼻の部分に余裕があるため空気がプールでき、息の漏れを押さえると同時に、息苦しきさも少なくなつたような気がする。生地の色も選

べることができ、一つ三百五十円は決して高くないと思う。このマスクに、ヒノキのエキスを使用するたびに一滴たらしめている。殺菌作用があり、リラックス効果もあるようだ。

月に1週間程度は在宅勤務、月の半数余りは一時間余りかけて出勤している。職場では二時間に一回程度、換気を欠かさないの、上着や毛布を自席近くに置いている人もいる。私は1〜2時間に一度は必ず離席し、二十秒程度かけてこまめに手を洗っている。こだわっているのは、帰宅後すぐにシャワーを必ず浴びることだ。

■パソコンで子どもの作文指導

コロナに感染しなくても、春への準備をせねばならない。ほとんど京都の自宅に帰れなかったので、次男の高校受験の作文指導を東京から続けた。作文は、毎年1600字を110分かけて書くことになっており、中学生にはなかなかの量だ。在宅ワークで学んだ知識を生かして、メールで送られてきた文章をPDF化して、そこに書き込みをして指導を続けた。

「コロナ禍をどう生きるか」「スマホとのつきあい方」などを本命候補に、十程度の出題テーマを予想した。本番で出たのはなんと「読書が与えてくれたもの」で、予想したテーマの一つではあった。「受験勉強だけではさ

みしい。中学時代に大事な一冊に出会えましたか」という問いかけだろうか。好きな本が一冊でもあれば、書きやすいテーマだろうが、同じ学校を受験した友達からは、「本はあまり読まないし…」との声も聞こえたという。小学生のころからサッカー漬けだった次男が作文で取り上げたのは愛読書の「カンペンノウの灯火」（豊福晋著、洋泉社）。リオネル・メッシがFCバルセロナの下部組織にいた時に、一緒にプレーした少年たちの「その後」を追ったルポルタージミだ。ちなみに、この本は私が、音信不通の第三十八号で「サッカーが大好きな少年たちのための2冊」の中で紹介したものだ。試験はなんとか合格しようだ。

■ワカサギ釣り

とはいっても、どこにも出かけないわけにはいかない。この時期、趣味の釣りは対象が少ない。特に河川の魚の多くは、禁漁期だったり、活性が低かったりするものが多い。その中で、ひととき注目を集めるのがワカサギだ。大きくても体長は十五センチ程度で、エサで使うサシは1センチに満たないものをさらに切って使う繊細な釣りだ。

どうせやるならば、と探した釣場は、長野県小海町の松原湖。標高千百メートル余りで、氷の穴釣りができる最南端の湖のようだ。

氷点下の早朝、漁協関係者のOKの合図とともに、重い荷物を背負って湖の上をポイント目指し早足で歩くところから始まる。釣りのアタリも繊細で、わずかに動いた竿先を見逃さず、合わせないとなかなか針がかりしない。釣り上げたそばから、バケツに入れたワカサギは水とともにゆっくり凍り出す。多くの釣りにあてはまる「大物を釣り上げたらうれい」という感覚はなく、ずっと動かず、ただ竿先だけを見つめる「静」の釣りだ。



これだけ書くだけで、二月の最終日の夜十一時までかかってしまった。明日三月一日は、昨夏に鮎釣りを楽しんだ、奥多摩の秋川の溪流解禁だ。今春初めてのヤマメに会うために、この原稿を書き終えられたのだと思う。

「ことばの教育」とは

『ことばの教育を問いなおす』を読んで

三浦 永理 (青翔開智中学教員)

教員生活一年目が終わろうとしている。

コロナ禍の混乱の中で始まった一年を経て、私は、学校で教員になるという選択によって気づけた事が山のようにあると感じている。

私が教員になろうと思ったのは、大学卒業後の最初の仕事の一年目が終わる頃のことだった。憧れの業界に入り、東京の中心で働きながら、その働き方がいつまで続けられるのか、果たして自分がやる意味があるのか悩んでいた。当時はナイーブだった。その中で、当時の状況がさまざまに影響して、「十代の成長を支えたい。それならば学校現場に行こう。」と思ったのが全ての始まりだった。

とは言っても、その後もしばらく仕事を続けるか、教員免許取得の勉強に専念するか、悩み続ける日々が半年ほど続いた。基本的に世の中のルールに乗っかれた側の人間であったから、そこから降りるのは億劫だった。

そうこうしているうちに、学生時代から不定期に書い

ていた日記が書けなくなった。かつては溢れ出していたことばが、その源がすっかり枯渇したかのように私の手元から離れていくような。ことば、ことば、ことば。

「三浦さんはやりたいことがいっぱいあって、それができていないから辛いんですね。」

とその渦中で声をかけられた時、自分の中で霧が晴れた。私は自分の意志を見失ったわけではなくて、それなことばを与える余裕がなくなっただけなのだ。ことばで形取る力、自らを省みて思考する力が弱くなっていたからこそ、他人の一言に助けられた。そこから自分で仕事の区切りを見つけると、そのあとは早かった。

私は今英語の授業を教えている。生徒と英語で対峙する時、互いにその器の頼りなさゆえに、うまくコミュニケーションを取れなかったり、年相応の深い思考にまで持っていけなかったり、もどかしさの連続である。私がしたいのは、細かいスペルミスや文法間違いの指摘だったのか。

そんな試行錯誤の繰り返しの中で、立ち返るのが、『ことばの教育を問いなおす』（ちくま新書）の一冊であった。

国語の教員として多くの実践を残した大村はま氏を通して繋がった三人の著者、英語教育研究者・鳥飼玖美子氏、大村はまの教え子である荻谷夏子氏、オックスフォードの教授である荻谷剛彦氏が「対書」のような形で執筆したもので、国語と英語という「ことばの教育」の観点から、話が進んでいく。そこでは、大村はまの教室で育てられたことばを超えた思考力を一時的なソフトウェアではなく、OSのようなものであると表現している。全ての基盤となるものであり、表向きのソフトウェアを動かす力である。

「「ことばの力」が大切なのは、それが「考える力」と深く密接な関係にあるからで、表面にある「ことば」の基底に存在する「考える力」をどのように育てるのか、それを追求するのが教育である、と確認したのが、本書の結論であると言えるかもしれません。」（「おわりに」より）

大村はま氏が国語科の教員として戦後教育に深く関わった一因は、戦争へと向かった日本への反省から、多くの人に考える力をつけてほしいという願いからだった。難解な言葉でしか思考できないというわけではなく、それぞれの「普段着のことば」で世界を捉えてほしいとい

う出発点である。それは、ネットなどで言葉が溢れ、いつでもどこでも気軽に発信できてしまう現代にも言えるのではないか。

学校教育における英語科の目的も、そのことばの基盤を整えること、考える力を身に付けさせることなのであれば、ただ単に問題を解いたり、複雑な文構造を言葉で伝えるだけではまだ足りない。本書では母語と外国語を比較しながら、異文化コミュニケーションの観点を持つて、英語という言語に接する授業の形も唱えている。例示されているのは、国語の教科書に出てくる「スイミー」を使ったものや、「星の王子さま」の訳に着目した授業だ。つまり、異質な他者がどのように世界を捉えているかを「ことば」を通して見つめ直す視点である。

英語の世界に囚われて、小さな器で向き合うのではなく、それぞれの「ことば」の裏側にある考える力と向き合うこと。国語との連携の先には、その力を鍛えるための教育の場があるであろう。

自分の手元に「ことば」を持ち、考える体力を持つこと。その一步を踏み出すために、そつと背中を押せるのであれば、私自身、科目に拘泥している場合ではないのだ。

「深い学び」をめぐる V

松田 裕史

(高校教員)

一月一六日・一七日に大学入試共通テストが行われた。昨年までのセンター試験から衣替えした試験だが、通常の試験のプレッシャーに加え、どんな問題が実際に出題されるか分からない不安とコロナも重なり、今年の受験生は大変な思いで受験をしたことだろう。

分析の必要もあり、私も共通テストの英語を解いてみた。リーディング(八〇分)から手をつけてみたが大問六問中、三問目を解いたところで小休憩をとった、というよりとらざるを得なかった。何ら文脈が関係のない英文がこれでもかと連発されて読む気が失せてしまったのだ。もちろんテストだから当たり前だが、テストを受けると身体がどこかへ彷徨していることを改めて実感した。第四問以降は一回ごとに(解答時間よりも長い)小休憩を挟み、何とか解いてみた。

賛否両論のある共通テストであったが、大学研究者や高校教員、予備校講師等、目にした限りでは否定的な意

見が多かったように思う。特に、「思考力・判断力」を問う試験ではなかったという意見が多かった(鳥飼久美子や木村達哉など)。一方、「思考力・判断力」を問う良問があったという意見もあるが、なぜこれほどまで印象が分かれるのか。それは、「思考力・判断力」の定義づけがなされていないからである。学習指導要領解説にも詳しくはされていない。せいぜい、問題作成指針に「事実や意見などを多様な観点から考察」と書いてあるぐらいである。その点のみで言えば確かにそのような問題は出題されたが、情報検索の域を出ない問題だったと私は思う。情報処理が速い生徒には有利な試験であり、じっくり考えて深い答えを出すことを得意とする生徒には相性が悪い試験である。しかし、マーク式、設問文が英語、英文素材が実用英語に偏っているという3つの条件がある限り、「思考力・判断力」を問うてみると多くの人が納得できる問題は作りようがない。この条件下では確かに良問と言えるかもしれない。

前号で奈良さんは、「本には知らなかったことを知ろうとする方向と、知っていることを崩壊させるといふ二方向がある。」と書かれていた。その視点をお借りすると、共通テストの英文に後者に属する英文は私にはなかった。前者に属するものは一つぐらいあったかもしれないが、一カ月経った今ではそれも定かではない。何しろ内

容が、ショートメールの読み取り、ウェブサイトの読み取り、データとコメントの読み取り、レポート文の読み取り、説明的文章の読み取りなどであるから致し方ない。いわゆる「実用的」な文が中心となるとどんな弊害があるのか、齋藤孝の次の言葉を引くだけで十分であろう。

「文学を読んで解釈しているから非論理的になる、ということはあるはずもなく、実用的な文章を扱っていれば論理的がつく、といったことも甘い幻想なのだ。」（『教育力』P.90）また、実用的と言っても日本語をベースに日常生活を送っている限りは実用的英文も非実用的ではない。グローバル人材育成という観点から反論されそうだが、グローバル企業に将来勤める生徒がそんなにいるというのだろうか（『日本人の9割に英語はわからない』という本がある。）。

共通テスト後は、北は北海道から南は鹿児島まで、日本各地を巡る日々が続いた、二次試験問題を解くという意味だが。二次試験は打って変わって英文レベルが高く、問も一筋縄ではいかないものが登場してくる。例えば、二〇一八年の京大では、「海外からの観光客に和食が人気だという話になったときに、文化が違うのだから味がわかるのか疑問だと言った人がいたが、はたしてそうだろうか」という文に続く英文を書かせる問がある。

また、二〇一七年では、文学には言語の壁があるので国

境があると言えるが、「音楽には国境がない」という言説に対して賛成、反対の両方の視点から英文を書かせる内容である（設問文もこちらは英語）。いずれも普段、当たり前前だと思っただ疑問にも思わぬことに疑義を呈する問である、「即興的」には答えられない。昨今の英語教育における即興礼賛とはまるでベクトルが違う。

しかし、テーマの観点で言えば（和）食や音楽は教科書の題材としてよく扱われるものであるので生徒になじみはある。問題は、授業においてどの程度、深い学びが行われているかによるであろうし、どのような探究的な学びが学校で行われているかにかかってくる。一カ月やそこらの対策でどうにかなるものではない。

* * *

斉田智里という研究者は『英語学力の経年変化に関する研究：項目応答理論を用いた事後的等化法による共通尺度化』の中で、一九九五年度から二〇〇八年度までの一四年間で、一貫して高校生の英語学力が低下していることを示した。学習指導要領のどこかに瑕疵があることは明らかだが、現場の最前線にいる者としては瑕疵を批判することに終始せず、それを乗り越える実践こそ具現化していきたい。

打倒 AI

〜授業論〜

(絶対自意識様)から(変態無意識さん)へ

芝野 浩貴 (地球探検家)

(前号 55号の続き)

AI 翻訳によって、「富士山、メルクマール、アプローチ、直角、数学」は正確に変換されたが、ほとんどの言葉は音を拾っただけで意味不明となった。これは翻訳プログラムが未熟のせいではない。きちんとゆっくりアナウンサーが原稿を読めば、ほぼ完璧に文字起こしができるサービスで、本を出版する人からは重宝がられている。ならば何故私の講演を AI は翻訳できないのか？

例えば、「150 通の証明」を(ひやつく…じゅう…しよう)と拾って「110 m 障害」に変換し、「資料 2 の哲人」を(りょう…にいの…てつじん)と拾って「料理の鉄人」に変換していた。ビッグデータを利用している。あることについて話そうとしたら、その分野のキーワードを使うことになる。それらが何個か同時に出てくると、逆問題で

キーワードに繋がる単語も決定される。単語を点として訳しているのではなく、単語と単語の間の線をビッグデータとして集めているので、よく使われるわかりやすい文は AI の標的となる。ひとつひとつの○を当てはめるのではなく、○ー○や○ー○ー○の模様を一息で引っ張り出す。

AI はアーティフィシャル・インテリジェンスの略で、1956 年に世界初の国際会議(ダートマス会議)でジョン・マッカーシー(今年は没後 60 年)が唱え始めた言葉である。フォン・ノイマンの影響受けながらも独自のプログラム言語 LISP (List processor の略)を開発した。私は学生時代、LISP でプログラムを作っていた。機械フォビアの私が自らコンピュータに向かうことはないので、欲求行為というより義務行為であった。当時の文部省の政策 C A I (computer aided instruction) の指定研究室になったのだが、担当教授がコンピュータを使えないことから私に白羽の矢がたった。コンパイラ型の FORTRAN が計算数学の祖だとすると、括弧を幾重にも使い多層構造を創る LISP はインタープリター型で、対話式プログラムの祖となる。

(反(知性主義))と(反(知性)主義)、(反(家族主義))と(反(家族)主義)のように括弧の位置によって意味は変わる。(A (B C))と(A B) C) について、前者はBCの対象にAするが、後者はCに対してABするとなる。例えの次元が少し異なるが、Aを金城、Bを洲鎌、Cを真栄田だとする。(いずれも沖繩によくある姓だが、地名でもある。)

① 金城(人)は洲鎌地区と真栄田地区を訪れた
② 金城(人)と洲鎌(人)は真栄田地区を訪れた
③ 金城地区を洲鎌(人)と真栄田(人)が訪れた
④ 金城地区と洲鎌地区を真栄田(人)が訪れた
操作(動詞)と対象(名詞)を入れ替えることができるので上の4つを括弧の配置で変えることができるのがLISP。この時(A (B C))と(A B) C)は、①~④のどれになるか? 音だけを拾われて「キンジョウ スガマ マエダ オトズ レタ」を認識されると、4つの区別がつかない。膠着語や助詞やアクセントに頼る。LISPのプログラムを左から読む時、「(」の数を「)」が上回ることはないので、括弧の中身が同じで、括弧の付け方でどれくらいの表現が可能かは、数学の教材にもなり、「カタラン数」でわかる。

ここまでは説明。私がAIに認識されないのは、私が色んな分野のアイデアを聞き手が捕まえるまでに話題を変えて、「わかりやすさから逃げてい」からである。私の話す固有名詞を繋げててもビッグデータにはない文脈となる。私自身が自分のAI翻訳文見ても、意味がわからないので

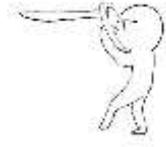
他人にわかるわけない。気がついたのはジョイス語に似ていたことである。ジェイムス・ジョイスは「フイネガンズ・ウェイク」を書くときに喃語を意識している。音が意味を持ちすぎた記号になる前の、赤ちゃん言葉。教員時代徳永兄弟にはお世話になりました。弟さんの徳永進医師は患者さんとのやりとりの会話を「一の言葉」と「二の言葉」に分類されているが、それで言えば「二の言葉」となる。聞き手がわからなかったら、講義する意味はないと言う人もいるだろう。なので、前号(55号)で取り上げた講義を聞いたパネルデイスカッションの講師の先生から「芝野さんの話、めちゃくちゃ面白かったよ」と言われたことを添えておく。ちなみにその先生は大手予備校のトップ講師で10年受験界をリードしてきた人である。わからないけれども支離滅裂な話はしていない。井上ひさしの「むずかしいことをやさしく、やさ

しいことをふかく…」と言う言葉は知っているが、小林秀雄の言う「簡単なことを難しくするのは虚栄だが、難しいことは難しく書く」という方に近い。50年も逃げていたら、プログラム言語も数千にまで広がり、私の手に負えないが、プログラムの変遷を一言で言う、(記号列)から(神経活動の巨大なベクトル)へシフトしている。計算は絶対的なるコンピュータに任せればいいという時代から、AIウィルスが人類に感染した時代になり、ニューロ的な振る舞いを必要とされる。これはこうだとわかる話に流れて、(正常化バイアス)や(確証バイアス)から逃れられない(絶対自己意識様)が変態しないと次々と来たる様々なウィルスに駆逐される。ウィズコロナというのは、ウィルスと共にいることでなく、ウィルスとは何かを見極めて人類が変態することである。

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示





太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

ワイドショー・ウオッチャーの憂鬱

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

2019年10月、当時コロナはまだ影も形もなく、東京五輪は翌年に当然あると思っていた頃。

東京の職場を去ることになり、退任挨拶であちこち回っていたら、五輪組織委員会と同じビルに入っている大手広告代理店の幹部が「時々エレベーターで森喜朗会長と一緒になるが、顔色が恐ろしいほど悪い。本番まで持つんだろうか」と話していたのを覚えている。

本人は「医者から駄目だと言われたガンが新薬で助かった」(2020年3月の五輪延期を受けた記者会見)と言うが、結局、病気ではなく、総理時代から有名な失言(女性蔑視発言)で辞任せざるを得なくなったのは何とも皮肉な結末だ。

◇ ◇ ◇

これで五輪招致に働いた安倍総理、猪瀬都知事、竹田JOC会長、そして森会長の4人全員が姿を消したことになる。1964年以来、五十六年ぶり開催のはずだった東京五輪は、エンブレム盗作から招致の贈収賄疑惑(こ

れで竹田会長が辞任)、高額の新国立競技場の設計変更、札幌へのマラソンコース変更、さらに今回の五輪組織委員会の森会長辞任など、前回に比べてゴタゴタ続きで、国民は「次は何か」とハラハラしながら見守ってきた。

コロナ禍による延期は不可抗力だったにしても、日本はもう戦後の黄金期の遺産を食い尽くし、国家の威信どころか劣化を示す大会になるのでは、とすら感じる。

女性蔑視以外に気になったのは、「東京五輪はコロナがどういう形であろうが、必ずやる」という発言。「聖戦完遂」というかつてのスローガンを連想した(まあ、総理時代に「日本は神の国」と失言した御仁ではあるが)。

これに「ロンブー」の淳が「僕には理解できない」と聖火ランナーを辞退して少しホッとしたものの、開催に疑問や不安はありながら、こうしたスローガンを上から突きつけられると弱い国民は多いはず。何より五輪組織委員会自体、コロナ禍が続く中、森会長が去ってもこの「呪縛」からはなかなか逃れられないのではないか。

◇ ◇ ◇

なぜか一理由は古代までさかのぼる(笑)。伯耆国庁(倉吉)に国司として着任した歌人、山上憶良は「言霊(ことだま)の幸(さき)はふ国と語り継ぎ言ひ継がひけり」と万葉集で詠んでいる。「言霊の国」では言葉に不思議な霊力が宿り、口にすればそれが現実になる。禁句、忌

み言葉（結婚式の「切れる」受験の「すべる」）がその代表。

それは千三百年後の国民性に沁みついてしまった。2
1世紀の現代、会議で既定方針への疑問や見直しを指摘すると、「そんな縁起でもないことを言うな」「お前の消極的な発言が、みんなのやる気を削ぐ」など超論理的（？）な理由で退けられ、村八分になる。この「言霊の国の超論理」を西洋人はまず理解できない。

哲学者の内田樹は「付度と同調圧力、これこそ軍部が太平洋戦争をやめられなかった理由」と指摘しているが、一方で「でも国民性だから、直せと言われても直らない」とも言っている（内田のこういう所が好き）。



「ロンブー」の淳のような人間がもつといてくれればいいが、83歳の森、82歳の自民党〇〇幹事長など、今の日本は権力を手放さない老人が政界や企業にはびこっている。「自分が仕切らないとこの組織はだめになる」と勘違いしているご老人たち、つまり「老害」である。

そうではない例外中の例外の政治家を、ひとりだけ知っている。わが鳥取県で知事をしていた片山善博氏。

昔、片山前知事に愛読書を探ねたことがある。古代ローマの哲学者、セネカの『人生の短さについて』（岩波文

庫）を挙げた。こちらも大学は一応、哲学科だから知っていたが、先方は「中学時代の愛読書」という。負けた。

片山氏いわく、「古代ローマ市民は、乞われて執政官などの重職に就くのは名誉だが、人生で最も大切なのは自分の時間、思索と内省の日々を持つこと」。セネカも執政官を務めた後、田舎で読書と思索の日々を送っていたが、暴君ネロに叛逆を疑われ、毒杯をあおぐ悲劇に遭う。

「だから、権力というのはバトンリレーのようなものなんです。古代ローマのように、受け取れば全力で働く、しかし次の走者にすみやかに手渡す」と片山氏。その通り二期であっさり知事から大学教授に転身した。

まあ、片山氏とは「目先が効く、逃げ足が速い」とよく言われる同郷（岡山）同士。「行財政改革で称賛を浴びたものの、地方の地盤沈下は止めようがなく、評判が落ちる前に辞めた」という意地悪な見方もないではない。それでも、テレビのワイドショーで政治家や官僚を一刀両断に斬る片山氏に「セネカを理解する政治家は現れないものか」とため息をつく。

職を退いて「思索と内省の日々」に耽るはずだったのに、朝夕にワイドショーを観ては、ざわざわと心落ち着かない日々を過ごしている。

いつにもましてぼんやりしている日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ラックセンター)

年中ぼーっとしているのだがこの時期は特にひどい。一日中くしゃみをしていたら日が暮れている。点鼻薬、目薬、お茶、なんか塗るやつ、いろいろ試すがどれも効果があるのかないのかよくわからない。効果はどうだ、と構えることもできないまま花粉にもてあそばれている。「注射とかありますよね」とか「顔にスプレーしたらいいよ」とかいろんな人がいろんなことを言う。この感じなんか似ているなと思ったら腰だった。腰痛と花粉症。軽症のあいだは耐えようと思えば耐えられるのだがある日突然に限界を超えて泣きたくなる。無数の対策があるがどれもイマイチ効き目が不明。ほぼ全ての人が何かしら悩まされている。腰痛と花粉症。くしゃみをするとうるが痛い。目が

痒いのはきつと腰のせいだろう。

明け方に目が覚める。トイレに行こうと縁側に出ると白いものが床下から飛び出してきた。ふわふわのかいネコ。庭を横切り家の隙間に消えた。ノラネコらしからぬ風貌。でもなぜ家の床下に。そういうえば最近家の前にネコのエサのようなものをまいていく人がいる。なぜうちの前に。つながりそうでつながらない。ネコとエサ。隣のマンションの人に聞いてみる。一階の人は「あーいますね。でっかいネコ。すごい堂々としてる」と言う。やっぱり。三階の人は「へーそうなんですか。子どもは動物飼いたいって言うてるんやけど」と言う。なにも解決しない。

銭湯に広告を出すことになった。ある日突然電話がかかってきてそうだった。「一度資料をお持ちしてもよろしいですか」と女の人から柔らかく言われ、はいはいと返事するとおじさんがカブに乗ってやってきた。「なんで私もここに来さしてもらってるんかわからんですよ」と言う。「電話した者のなにかにひっかかったんやと思うんですけどね。本人もそれがなんやったかわからんゆう

てて」。正直な人はそのまま銭湯の組合や近所の風呂屋の話、そして鏡のサイズと料金の話をして帰って行った。その辺の話は理解できるのだが一歩目がよくわからないので結局すべてがよくわからない。わからないままに話は進み、いつの間にか「出すか出さないか」ではなく「どんな広告を出すか」の話になっている。

銀行の口座に「シヨクキ ヨウアンテイキヨ」という方から六十三円が振り込まれている。まったく身に覚えがない。十円玉と、五十円玉と、一円玉三枚。道端に落ちていたら黙ってポケットに入れておく金額。だが振り込まれると急に怖くなる。カタカナも怖い。濁点が独立しているのも怖い。どうしたらいいのか。経費の全般を勝手にしてくれる優秀な会計ソフトが六十三円仕分けできずに困っている。

山科をぶらぶら歩いて昼食を探している。チェーン店に入らないとこっさり決めたので、みるからに怪しい中華料理屋一択になりつつある。もしくは眠眠。眠眠はチェーン店なのか迷っていると、渋い店構えの定食屋にでくわした。看板も見ずに

暖簾をくぐる。席はほぼ満席でカウンターしか空いていない。そしてそのカウンターのガラスケースには鮮魚が並んでいる。しまった、と思ったがもうお茶とおしぼりをもらってしまった。厨房では強面の親父が寿司を握っている。財布の中にくら入っているかを思い出そうとしてみる。ドキドキしながら渡されたメニューを見る。「これがセットね」と指差された先に九百円の文字。とりあえずほっとするが、なぜ独り良心的な寿司屋でランチを食べようとしているのかわからずまったく注文が決まらない。

八代日記

(十二)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

で金棒を作り右手に握り締め、低い声で「あっはっはっはっは。鬼だじよ。」と言いながら鬼の真似をし始めた。これは一体どういう解消の仕方なのだろうか。その金棒で弟を打ち付けたりもしている…。転化しきつたと見ていいのだろうか。鬼をも飲み込んだのか。

二月某日

八代日記も十二回目だと。転職して一年が経とうとしているのか。早い。仕事では何も達成できていない。ほんの少し八代弁が身についたくらいのものだ。

八代の人は八代のことを「やつちろ」と発音する。これは上手く言えるようになった。「しなくてはいけない。」は「しせんばん。」となるがこれはまだ上手く使えない。ちなみに熊本弁では「しせんといかん。」。

二月某日

デパートの地下の菓子売り場で虎屋を覗いてみた。カタログの冊子ももらったのだけれど、無料の配布物とは思えない凝った造本から気合が入っていて参った。133ページもあるし。写真も文章も良く、読み物としても全然楽しめる。奥付に35,000と数字が打ってあるが発行部数だろうか？

二月某日
節分の日、保育園にて先生の扮する鬼が怖すぎてクラス中が阿鼻叫喚だったらしい。長男も膝から震えるほど怖かったらしく、何とか豆を投げつけることはできたらしいがあまりの恐怖のせいか夜中に寝言で鬼がどうしたこうしたとうなされていた。そして翌日からしばらく保育園に行けなくなってしまった。

どれだけ怖い鬼だったのだろうか、そこまで怖がらせる必要があったのだろうか、と釈然としないがナマハゲなんでもっと怖いだろうしなあと思いつながら子どもがどのように恐れを解消して行くのかを見守ることにした。
2、3日は寝言が続いたり、「鬼は怖い」とかふとしたときにこぼしたりしていたが、もう少し経つとブロック

二月某日

バンドのアルバム制作は例によって遅いながらも進んでいる。曲は揃いミックスもあと少しで終わる。あとはジャケットだがこちらはいつも世話になっているデザイナーに靈感が宿るのを待たねばならない。

毎月、音信不通用の原稿の後半はケバブジョンソンの歌詞を載せているが、これまで出しているアルバムの曲はほぼ出尽くしてしまつた。早く次のアルバムの歌詞カードを作つてしまわないと、歌詞が無い分を埋め合わせる長文を書く自信がない。

少し歩き出せば気分も変わりそうだけど表のことなんて知りたくもないの

夢が覚めなければどこまでも行けるのかしら
ほこりが舞うように浮かんでいたい

狙いを定めてヒットマン

地獄へ道連れダンテさん

翼の外れたバードマン

溶けて消えてく景色に混せて

波止場を出て行く思い出も

鼻をなぞるだけさバイバイ

苦手なことばかり覚えてしまひそうよ

大事なもののばかり壊してしまうの

七つ時を打てば時間も止められそうよ

魔法を信じてる人にもなれるの

スープを飲ませてコックさん

おかわり残したファットマン

ビートに抱かれたバンドマン

全て鳴らして私の全て

波止場を出て行く思い出も

鼻をなぞるだけさバイバイ

(ケバブジョンソン「波止場」作詞：杉浦真寛)

不思議町の系譜

ムラカミヒロミ

(ライティング・ブックマン)

迦れば、迷路・迷宮・不思議町ものとしては、つげ義春の「ねじ式」あたりに、淵源を求めることができそう。打ち捨てられた漁村、さびれた花街、薄汚れた工場街が、何の脈絡もなく現れ、読者がいつかどこかで見たような風景と繋がり、不思議な郷愁を醸し出す。

彼のテイストを正當に受け継いだ、と言えそうなのが逆柱いみりである。最初期の『MaMaFuFu』は、恐ろしいばかりの描き込みで眩暈がするが、『ケキヤール社始末』は一転シンプルな線になって、嘘八白の世界旅行を樂しむ風がある。

その後も、目黒雅叙園、下町博物館、寄生虫館、グエル公園、九龍城などの建築・装飾を食欲に取込み、ラヴクラフトの世界観やギーガー的内臟描写への指向を見せ、ヘタウマ絵柄と相俟って摩訶不思議な作風を作り、カルト的人気を博すに至る。

登場人物も、一つ目のネコやら、カエルやら、カッパ

やら、正体不明の軟体動物やら甲殻類やら取り取り様々で、妙な存在感がある。

更には、『空の巻き貝』あたりから、幼年期リビドーの塊のような少年二人組を新たなキャラクターに加え、タルホ世界をも呑み込んだ貪婪な世界を展開している。余人を寄せ付けない強烈な個性の漫画家である。

Kashmir は少し趣が変わるが、明らかに継承者の一人と言つてよからう。近作に、鉄オタものの『ばらのま』と『てるみな』があり、前者は一応、正統派鉄道紀行ものとして読めるが、後者は、主人公を猫耳少女にし、現実にある鉄道路線を大胆かつ破壊的に改変した、ある種のパラレル・ワールドもの。

両者は補完し合っていて、前者で描けないことを後者で描き、後者で書けないことは前者で書く。一方の登場人物が他方に出張つて、鉄道蘊蓄を語るあたりは、その表れである。

そういつた按配で、『てるみな』は、現実世界から飛躍した夢想空想妄想全開の作品といえる。例えば、秋葉原の商店街では、地下に行く程古い時代の階となつて、地層のように積み重なっている。下の階には、パソコン、オーディオ、アニメ、同人誌、メイド喫茶などが朽ち果てたまま、軒を並べている。

永井荷風の「遷東奇譚」や、滝田ゆうの「寺島町奇譚」のような下町や特飲街の佇まいを強烈に進化させた稠密都市がある。

勾配百八十パーミルの超急傾斜を、旧餘部鉄橋のような鉄組トレスル様の柱が支える鉄道線があるかと思えば、上空千八百メートルにクラウドベース（分かるかな？）のような新空港もある。

レトロスペクティブSF、エロティック・ファンタジー、ナンセンス・コメディ、様々な演出で楽しませてくれる。

違法建築満載のぐちゃどろ感もなかなかのもので、間違いなくクトゥール神話の世界に足を突っ込んでいる。逆柱も *Kashmir* も、建築描写において東南アジア的世界観を共有しているのが面白い。これは、つげ作品には見られなかったものだ。

Panpanya（パンパンヤと読むのか、パンパニヤと読むのか、未だに分からない。何せ奥付のコピーライトもアルファベット表記なので。前者だと一寸不味いような気がするし、さりとて後者では、意味不明のポルトガル語か、ホニヤタウンみたいで出来が来ない）の一連の作品は、もう少し穏当で、日常生活を一步だけ踏み外したような、見慣れた町の、いつもは通らぬ小道に迷い込んで

しまったような違和感、面妖さ、ちよつと困った感に満ちている。

御隠居の散歩風でもあり、トマソン探索風でもあり、SF（すこし、ふしぎ）風でもある。フリーハンドで描かれた建物や商店街が不思議と既視感や郷愁をそそる。最初の商業出版である『足摺り水族館』は、色々なタッチが入り混じり、作者の手探り感が楽しめる。

現在までに七冊刊行されているが、登場人物にスターシステムを採っているため、それぞれ別個の作品であるにも拘わらず、世界の一体感があり、連作であるかのように錯覚させる。

主人公のおかっぱの少女は作者の分身だろうが、その他、犬頭のレオナルド、貉（ムジナ）や猫（マミ）という名の不思議な生き物などが主たる登場人物で、就中、古いガスの分岐器具のような、組み立てパイプのジョイントのような、昔の漁具のような、旧式の潜水ヘルメットのような、妙な形状をした頭の人物のインパクトが頗る大。どの人物（動物）も、妙に理屈っぽく、小理屈とも屁理屈ともつかない空理空論を弄び、現を抜かしているのがいい。

鳥取あれこれ

その五十五

内田 克彦 (地域研究家)

(承前)

村岡範為馳は、都合二回ヨーロッパに行っている。「履歴書」(県立図書館開架資料)によると、最初が一八七八(明治二一)年、「師範学科取調ノ為メ独逸國へ差遣候事」であり、二回目が一八八八(明治二二)年、「御用有之欧州へ出張ヲ命ス」であり、三回目が一九〇一(明治三四)年、レントゲンが受賞した第一回ノーベル物理学賞の祝賀会への出席のためである。

そして、一回目のときには、一八八一年「二月廿六日独逸國ストラスブルク府大学ドクトル、ヒロソヒーノ学位ヲ得」。「同年四月五日独逸國ストラスブルク府師範学校卒業」とある。

一回目の渡独については、平田宗史著『欧米派遣小学師範学科取調員の研究』(一九九九年刊)が詳しく、それによれば、小学師範学科取り調べのため、当時欧米に伊沢修二ら七名が派遣されており、そのうちの一人が村岡である。そして、アメリカへの派遣の「4人は、師範学校に入学し、卒業しているが、ヨーロッパの〔村岡ら〕

3人は、師範学校に入学したのさえ分からない。師範学科の調査は、したであろうが、「筆者略」彼等が、在学していたという学籍簿を、今のところ、見つけ出していない。」と書かれていた。更に、同著の「おわりに」には、次の記述がある。

ただし、ストラスブルク師範学校へ行き、調査したことは〔筆者略〕留学中の1880(明治13)年2月、『平民学校論略』という翻訳書を出していることからも披瀝される。〔筆者略〕ストラスブルク大学での学位取得については、当時のドイツの大学では、大学登録し、いくつかの講義を受け、金さへ「ママ」あれば、学位取得は、容易であったというので、事実であろう。

今後は、同著を参考文献として、村岡の事績を語る必要がある。

さて、村岡と同時期にフランスに派遣された人物に、旧足利藩の西村貞がいる。西村は帰国して一か年を過ぎた一八八一(明治一四)年二月、体育伝習所の最高責任者である主幹となっている。平田著には、明治十六年七月十日付けの「体操伝習所主幹西邸貞」とする修了証書の写真が掲載されており、よく見ると、そこには「鳥

取県 松岡成喬 三十二年三月」と書かれていた。

鳥取県の体操関係者であれば、鳥取県スポーツ協会の油野利博名誉会長が御存じだろうと、問い合わせたところ、早速、松岡についての数々の資料の提供を受けた篠村昭二著『鳥取教育百年史余話 上』に、全く同じの修了証書が載っており、篠村著『鳥取師範物語上巻』には、「この証書は、昭和四十八年十二月二十三日に私が公表したが、あまり注意してみる人は無かった」と書かれていた。

そこで、『因幡人事興信録』（一九三七年刊）によつて、松岡の経歴を追ってみた。松岡は一八五〇（嘉永三）年に生まれ、尚徳館に学び、一八七三（明治六）年鳥取市立川小学校創立に際し校長となり在任一年、翌年、官立広島師範学校に入学した。なお、このとき、鳥取県からは遠藤重ら一八名が入学しており、松岡はそのうちの一人である。一八七五年に卒業後、鳥取県立師範学校及び中学校の教諭を兼任、とあるのみで、一八八三年一月から七月まで東京師範学校及び体育伝習所に学んだことは全く触れられておらず、鳥取県が誇る輝かしい体操の歴史への、帰郷後の貢献が今少しよくわからない。

そして、一九九四（明治二七）年には、「鳥取県属」に転じて「学務課在勤」、一九〇〇年「県師範学校長と

教諭陣が対立し、五名の教諭への休職命令に発展した年である」には辞任し、「爾来自宅に閑居晴耕雨読の境涯にある」**■**趣味古書とある。篠村前著には「西邨（貞）や高嶺（秀夫）といった、当代一流の人物に接して帰った松岡だが、彼は中学と師範に勤めた後で、県庁の役人になった。そして、松岡の足跡は消えてしまった。」と書く。

本当に「消えてしまった」のだろうか。一九三七年四月二七日付『鳥取新報』には、同二五日米寿祝賀会が催され、「賛成者百三十余名の内市及び付近在住者六十名余」が集まった、とあり、同年十一月号の『大因伯』には、「地方教育界の耆宿たりし同（松岡のこと）氏は九月二十五日八十八歳の高齡を以つて逝去さる。」との記事が載るなど、晩年までその動向に関心が持たれている。

松岡は、鳥取県史ブックレット『鳥取県教育会と教師』（二〇一五年刊）の「明治期鳥取県教育会幹事の4年以上在任者一覧」表によれば、「在任期間」欄に「明治24〜27年、30〜32年」とあるように、「県属」の間も、県教育会の実務に携わっていた。そこでの関係が濃密であったとも考えるがよくわからない。

戦禍の楽人Ⅲ 戦下のヴィルトゥオーゾ Bの場合

武中淳彦（秦阜梅林 本名）

（楽人）

Bノヴォオトウニー、名門プラハS.Qの顔。ソリストとしては特にバッハの無伴奏ミソナタ、パルティータ全曲盤は全米で、かのシェリング盤を上回るセールスを記録した。実際ノヴォオトウニーシステムの重音奏法を中心とした「純正調オルガン」のような力強い解釈は端正、小ぢんまり綺麗に纏まったシェリング、グリユミオーやスーク、ズスケ盤等には無いヴィルトゥオーゾ風の迫力、雄大なスケール感、朗々たる歌心と劇的緊張感や説得力に満ちてゐる。

僕は、彼からヴァイオリンと室内楽、そして指揮法を教わった。亦以前書いたようにチャペックやヴォジシエツク（※1）への目を拓かれたのも彼の助言。

I ソリスト

キャリア初期、彼はプラハ市立交響楽団の首席コンサートマスターと「ソリスト」を兼務した（※2）（契約でバッハからバルトークに至る協奏曲の標準レパートリーを各

シーズン最低1曲は弾くよう義務付けられて居た）僕がテープで聴いて驚嘆したのは或る夜のプラハ響定演。前半先ず大バッハのドツペル協奏曲を第2ミのK.ブジヴィルと、そしてモーツアルトの協奏交響曲をヴィオラのL.マリーと…（ここまではよくアマデウスQのN.ブレインも演つてゐるが）更に後半J.ブラームスのドツペル協奏曲をチェロのJ.シルツと共演、全てのヴァイオリン独奏を受け持つと云う離れ業をやつてのけた、まさに独壇場（管弦楽指揮は往時の音楽監督V.スメターチェク）何といふヴィルトゥオーゾぶりであらう！

II 灰色の青春：

そんな彼が戦時下、二年間武器工場に強制労働を強いられて居た事実「日に18時間「人殺しの道具」を造らされていた！んだ。なんてこつた、私はすっかり青春の日々を灰色に塗り潰されて了つた！「昨日迄バッハやベートーフェン、モーツアルトやシューベルトを奏で、楽弓やペンしか握つた事の無かつた同じ手で文字通り「人殺しの片棒を担がされてみた」んだよ…」18時間の後は睡かつた…ひたすら。強制労働、就寝、労働、就寝…：単調な繰り返しだけの日々、次第に今日が何日でどんな日か？…そして自分が何処で何をしているのか？何もかもさっぱり解らなくなつて了つた。

自分が若しカフカならば、こんな状態から何かしら奇

怪な物語でも紡いだかもしれないけれど…それは出来ない相談だ。自分一人なら？ 聰或いは国外に逃亡し、時をやり過ぎせたかもしれないけれど生憎、里には家族があり、自分が去った後の彼らの事を考えると「人質」をとられているも同じ、迂闊な事は出来無かった。

III

漸く戦争が終わり「解放され」て私が何したと思う？
「vin 弾いて弾いて弾きまくった?!」 「そう、其れから2年間は朝から晩まで毎日18時間弾きまくった」 「ずるってえと、都合4年も！」「捕囚の日々」が続いたんですね？」笑、此の生粋のオプティミストは、辛い日々をこそ其れ以上語ることはなかった…が。

目を上げ徐に「淳彦、戦争はいかんよ。…此の世の中、白黒と断言出来る事はそうザラには無いけれど。戦争の犠牲になる世代は、いい加減自分らだけにして欲しい、まあ局地的な戦争や武力紛争はちつともなくならないけれど…。」静かにそう言う。「さあ食事にしようぢやないか」再び快活な足取りで階下に消えて行った…。折から食卓のTVで(※③) 容赦なくボスニアでの凄惨な戦場の様子が、生々しく報じられていて僕らの食欲を一気に削いで呉れた。

(以下次号)

(※1) 東欧旧共産圏では「専属ソリスト」と言う契約システムがあり各シーズン、協奏曲の独奏者として活動した。

(※2) チャペック兄弟はチェコの作家、イラスト画家ヴォジシェックはシュューベルトより後に生まれ先に逝ったチェコのベートホーフエン！短い生涯にすくなくらず逸品を遺しており母国と独逸圏でのみ高名、世界的評価が待たれる…

(※3) 往時チェコは放送の国際協定に批准して居なく、戦場の砲火に粉々になる人体等の様子等が夕飯時無造作に流されている事もあった。目を覆いたくなるやうな辛い映像、しかし…。

「今回の一枚」

Aドゥヴォルジヤーク弦楽四重奏曲へ長調作品96「アメリカ」Fr.シュューベルト同ニ短 op.posth.D810「死と乙女」
プラハS.Q (1967/79 スupraフォン)



イラスト 秦阜 梅林

春の豆

あきの素生

(くうねるめがね)



寒い冬だった。ラニーニヤ現象だとかで、きちんと予想されていたから覚悟はしていた。換気がマストな状況も寒さに拍車をかけた。持っているターゲットルネックのセーターを総動員し、ヘビーローテーションする日々。例年であれば、もう少しバリエーションを楽しんでいたように思うが、Vネックはおろか、丸首のニットにすらなかなか手が伸びなかった。本能が首を守れと言っていたのだろうか。

さらさらの雪に長靴を埋もれさせながらの通勤、落とす端から車に張り付いてくる本当に寒いときの雪の降り方、目を凝らさないとわからない歩道の凍みた箇所、そんなものはおかまいなしで朝から爆走する中学生など、冬らしさを堪能し尽くしたので、もうそろそろ解放されたいものだ。

コロナの影響は相も変わらず。めがねを曇らせながら、

マスクを着けて歩く。一年前は、国内でコロナの感染が確認されてひと月あまり、どこか対岸の火事のように感じていた心持ちが自分の意思とは関係なくぐいぐいと変わって、不安や危機感に足先から浸かっていくような、そんな時期だったように思う。今は、「元どおりの生活」がどんなものだったかすぐには思い出せないくらい、まさにコロナ禍の真っ只中にいる。始まった頃の大きな混乱は収まったように見えるが、それが日常になっていると敢えて思い出さなければ忘れていくほどの真っ只中だ。バッテリーが切れないように車を走らせなければ、とか、いつものスーパ―には置いていないものを買いに行かなければ、とごくたまに出かけたときに、はっと気付く。こんな時間が以前は当たり前にあったこと、気持ちを楽しく軽くしてくれること。そうやって気づくのだけれど、「日常」に戻ると、華奢なようにいて丈夫な柳が知らず知らずのうちにかけられている（寒さとこたつのせいばかりではなからう）。いつか外的な状況が「元どおり」によくなるとしても、自分の中身に起こった変化には、意識的なりハビリが必要だろうなと思う。

そんなゆるやかに閉じ込められたような日々の中で、「いつものスーパ―」は季節の移ろいを少し先取りして教えてくれる。もう菜の花が出て、とか、たらの芽あ

るけどこしあぶらはどうだ、とか、毎年同じようなことを考えながら買い物かご片手に店内をぶらぶらしているが、今年は少しだけ、うれしさが大きい。春の味覚、というピンク色のシールやのぼりにも心が和らぐ。

春は豆の季節でもある。気づけばスーパーにいろんな豆が並んでいる。そら豆、絹さや、スナツブエンドウ、グリーンピース。豆は全般的に好きだ。愛する枝豆は夏の豆だが、春の豆を堪能したあと、まだ好物の豆が控えているのは幸せなことだ。

そら豆は、なんといつても形がいい。にこりと笑ったような黒い筋。ひょうきんな感じのする曲線。ごく淡い緑色も、あのふかふかのさやに、ひとつずつ大事におさまっている様子も愛らしい。さやごとグリルで焼いて、何もつけずに薄皮ごと食べる。歯ごたえのあるものが好みなで、皮がある方がいい。塩ゆでしなくても、豆の味で十分旨い。スープやパスタなどにも入れてみたいのだが、手の込んだ料理にする前に、こうやって平らげしてしまう。

よく作るのは豆ごはん。むき実で売っているグリーンピース（むきピース）を見かけると、買い物かごに入れたくなる。現に、まだ冷凍庫に凍る豆ごはんがあるにもかかわらず、すでに次のむきピースが冷蔵庫に控えている。

気に入りのレシピは、豆を米と炊き込むのではなく、別ゆでにするもの。塩を入れた熱湯で四分くらい豆をゆで、豆はとっておく。ゆで汁は冷まして、米を炊くときに使う。水とゆで汁と酒を米の量に合わせて入れ、粉末の昆布だし、千切りした生姜と一緒に炊く。炊き上がったら、豆を入れて混ぜる。塩と昆布のごくシンプルな味付け、豆の歯ごたえが活きていて、私好みの豆ごはんだ。少しくせのある豆の風味がご飯からふわりと香る。小さくまんなまるい緑の豆が、白いご飯にぼつぼつと見え隠れしているのが、ポップな感じで春らしい。

旬をいただきながら、暖かい季節を待つとする。

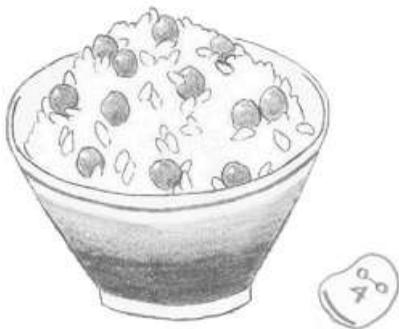


イラスト あきの素生

バナナ牛乳



ドラメリア (座敷わらし)

ああ疲れた、でももうひと頑張り。というときバナナ牛乳を買う。わたしの中で特別な位置にいる飲み物。最近お気に入り、疲れたときはこれを飲んでいきます。そう手紙に書いてきた友人がいた。

高校時代の仲のよい友人だった。本の話、マンガの話……他愛のない話題ばかりだったが、喋っていると時間を忘れた。高校卒業後「声優になる」と言って誰にも相談せず都会の専門学校に入学し、親の援助(というか賛同)を得られなかった彼は、新聞奨学生をしながら専門学校に通っていた。便利な電子ツールを持たない同土手紙をかわずと、「常に眠い」「お金は貯まるが使うところがない」などとハードな日々を窺わせる文章が並ぶ。そんな彼が日常を綴った中に「最近、疲れたときにバナナ牛乳をよく飲んでいます」という妙に印象的な一文があったのだ。バナナ牛乳。似合うような、そうでないような意外な気分がしたものだ。

彼は随分大変だったろうと思う。専門学校を卒業し劇団に入ってから、一度だけわたしの前で歌ってくれたこ

とがある。公園で身振り手振りを交えて熱唱する姿を眺めながら、……うーん無理だよなあと思ったのを覚えている。涼やかな目元。長い手足に小さな顔。舞台映えるスタイルに恵まれながら、彼は大変な音痴だった。かなしいほどに。

夢を追う日々にごどこ折り合いをつけたのだろうか。いま彼は故郷の町で働いている。相変わらずアニメもゲームも好きだと聞く。

もはや定番商品としてファンを獲得しているのか、バナナ牛乳も周りから消えてしまうことはないようだ。だから、そうだ頑張らないと思ったとき、わたしはまたバナナ牛乳を買う。



・編集後記:

バナナをそのまま食べるなら、シュガースポットのひとつもない青々としたものが好きです。柿も、ぶつけたら甲羅がわれるような固いやつが好み。というか熟したものが何だかこわいのです。

ドラメリア (編集長)
読書と知的好奇心。いろんな人と知り合いたい。いろんな本と出合いたい。そして記憶は「ことば」として残る。

求めているのは、いつも「ことば」のような気がする。

奈良敏行 (発行人)